

## 『万葉集』 安貴王と市原王

山野清二郎

【キーワード】 安貴王、八上采女、紀女郎、市原王、大伴家持

### 【要旨】

『万葉集』には多彩な歌人がいるが、安貴王と市原王の父子は、生没年すら知られない、いわば無名の存在である。本稿は、この二人の王に注目して、『万葉集』の歌を素材にしながら、それぞれの人物像について考察したものである。安貴王は、禁制とされた采女との恋によって、出世の道を閉ざされた。また、この恋は、妻の紀女郎との間にも悲劇を生んで、王は不遇の時代が続いたと考えられる。子の市原王は、そうした父に向けて、幸いを祈る歌を詠み、また独り子の侘しさを嘆く歌を詠んだ。市原王は、写経所の舍人として、仏教関連の仕事に精励することで、政治的な存在感を示した。その結果、一時的に父の安貴王と官位が並ぶという事態が出来た。さらに市原王には、湯原王や大伴家持との交友関係が窺える歌があり、『万葉集』の最後尾を飾る歌人の一人でもあった。しかし、恵美押勝の乱に巻き込まれたのか、それ以後には消息が知られなくなった。

### はじめに

歌数も多く、年数も長期に亘る『万葉集』の中には、歌から作者の像が浮かび上がる例も多いが、閨歴も定かでなく、かつ読んでいる歌の数も少ない歌人となると、その実態を究めることは容易なことではない。歌意は、言葉の解釈でかろうじて辿れても、それがどのような場で、どのような含みを有して詠まれたのかとなると、背景を形づくる情報等が欠落していた場合、ほとんど推定に頼るほかなくなる。しかして推定は一種の仮説であり、仮説は一度は許されても、その上に次の仮説を積み重ねることは禁物となる。だが、歌ごとに場面が変わって来ている場合は、その都度新たな推定を挿入せざるを得なくなろう。歌の散らばり幅が大きい条件のもとで、その歌人の人間像を描こうとしたならば、歌と歌との間をどうつないで像を形づくればよいか。そこを恣意に基づく推定で整合性を求めていくと、結果的には小説もどきの人物が出来上がり、それは研究の名には値しなくなる恐れがあるだろう。どこまでが推定区域内のもので、どこからが想像に過ぎないものか、その境目を見定めるのは極めて困難な作業に映る。

本稿で取り上げる安貴王と市原王は、父と子という関係でありながら、どちらも生没年が未詳であり、閨歴も一部定かでない。また、二人が『万葉集』に遺した歌も、決して多いとは言えない。しかし、わずかな史料とその歌から父子の人

物像が滲み出てきて、興味を唆られる存在といえる。以下、可能な限りの推論で、それぞれの人物像を追ってみることにしよう。

なお、歌の本文等の引用は、佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集』一～五（岩波書店、二〇一三～二〇一五年）の訓みによった。

## 一 安貴王

『万葉集』第三期の歌人の中に、天智天皇の曾孫に当たる安貴王という三世王がいた。阿紀王・阿貴王とも書かれる。安貴王の祖父は志貴皇子で、志貴皇子には春日王・白壁王・湯原王などの子がいたが、春日王の子が安貴王であった。安貴王の生没年は未詳である。だが、王の遺した歌（306・534・535・1555の全四首）の制作年代から推定すると、おおよそ西暦七〇〇年前後の生まれではなかったかと考えられる<sup>(1)</sup>。子は一人しか授からなかったとみえ、それが市原王であった。市原王については後述する。安貴王の叔父に当たる白壁王は、六十歳を越えてから皇位が巡ってきた。これが奈良朝最後の帝となった光仁天皇である。また、光仁天皇の子は、平安朝を開いた桓武天皇である。よって、安貴王と桓武天皇とは、従兄弟という間柄になる。しかし、光仁天皇の甥とは言いながら、安貴王はさしたる待遇もされないままで生涯を終えたらしく、おおよそ華やかさとは程遠い存在ではなかったかと想像される。『万葉集』に遺る安貴王とその縁辺の歌々には、悲哀漂う容易ならざる響きがあるからである。

まずは、306の歌を見てみよう。

伊勢国に幸したまひし時に、安貴王の作りし歌一首  
306 伊勢の海の沖つ白浪花にもが包みて妹が家づとにせむ

題詞には年月の記載がないので、いつの行幸を指すのかは定かでないが、『続日本紀』によると、養老二年（七二八）二月、元正天皇が美濃国の體泉に行幸し、その際に美濃・尾張・伊賀・伊勢などの国郡司に位を授け、禄を賜ったとあるので、行幸が伊勢にも及んでいたことが知られる<sup>(2)</sup>。306の歌は、この時の作であろうということは、諸説ほとんど一致している。当時、年若く位も授かっていない王であってみれば、伊勢湾に打ち寄せる目の覚めるような白波は、初めて目に

(1) 安貴王の生年を明確に推定している書はないが、澤瀉久孝『萬葉集注釋』巻第三は、306の歌の解説部分で、「この作のなされたのはまだ無位で弱年の頃であったと思はれる」と述べている。この説に基づいて逆算した概年数である。

(2) 『続日本紀』養老二年（七二八）二月条。「己丑。行所經至。美濃。尾張。伊賀。伊勢等國郡司及外散位已上。授位賜祿各有差。」とある。

する感興を呼ぶものであっただろう。「伊勢の海の船上での作か」と捉える向きもあるが<sup>(3)</sup>、船の上で揺られて見た白波よりも、「もが」という願望の助詞の用法からして、遠く離れて手の届きそうにない白波を陸地に咲く花に見立て、それを己が手に包みて妹への土産にしたいと望んでいることからすると、船上よりも海岸での作とした方が自然に思われる。若々しい歌である。

しかし、この歌中の「妹」とは、一体誰だったのだろうか。実は安貴王は、紀女郎なる女性を正式の妻として迎えていたことが、643の歌の題詞（後掲）から判明している。その結婚がいつごろ結ばれたのかは明らかにできないが、もし婚約の段階まで進んでいたのであれば、この歌の「妹」は、紀女郎を指しているとみて少しもおかしくはないだろう。都に残してきた婚約者が新妻に対して、白波の花を贈りたいと夢見て詠じたもので、ある意味では微笑ましい明るい未来を予想させる歌になるわけである。

ところが、そう単純に事は運ばなかったようである。巻四に載る534、535の歌とその左注によれば、その後に変な出来事が起きたことが知られるからである。なお、これらの歌は、前後の歌の配列からみて、養老五年（七二一）から神亀元年（七二四）までの時期だったと推測されている<sup>(4)</sup>。

#### 安貴王の歌一首 短歌を并せたり

- 534 遠妻の こちにしあらねば 玉梓の 道をた遠み 思ふそら 安けなくに  
嘆くそら 苦しきものを み空行く 雲にもがも 高飛ぶ 鳥にもがも  
明日行きて 妹に言問ひ 我がために 妹も事なく 妹がため 我も事な  
く 今も見ること たぐひてもがも

#### 反歌

- 535 しきたへの手枕まかず間置きて年そ経にける逢はなく思へば

右は、安貴王の因幡の八上采女を娶るや、係念極めて甚しく、愛情尤も盛なり。時に勅して不敬の罪に断め、本郷に退却せしむ。ここに王の意悼但して聊かにこの歌を作りしなり。

歌に詠まれた「妹」は、左注に述べられている八上采女のことであり、作者の安貴王は、離れ離れになったその妹をひたすら恋慕している。306の歌と同様に、この歌でも「もが（も）」が多用されている。他に目立つ点として、534の長歌は、歌末が五七七のリズムで終わっており、口承歌の流れを汲む型であるという指摘もなされている<sup>(5)</sup>。こうした歌の体裁が、そこで起きた事態とどれほ

(3) 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎校注『萬葉集』1、新潮日本古典集成（新潮社、一九七六年）の同歌頭注。

(4) 土屋文明『萬葉集私注』2（筑摩書房、一九八二年）巻第四（535）の解説。

どの関連性を持つのかは明らかにしがたく、かつまた左注の語るところも、不敬の罪を問われて本郷に退却せられた人物が、果たして安貴王なのか八上采女なのか、記述に曖昧さが存するため、真相はほとんど見極めがたい。だが、采女という、本来は天皇の半ば私有で恋愛法度とされた女性に対して、安貴王が人に知られるほどの関係を持ったことで、深刻な事件として問題になったことは確かなのであろう。

なお、左注にいう不敬の罪による本郷退却は、郡より貢進された采女の地位を奪った罪としては成り立つが、王という身分のある者に対する罰としては、位の剥奪、あるいは解任、除名などがあるはずで考えがたい<sup>(6)</sup>という理由からだろうか、多くの注釈書は、断罪退却させられたのは八上采女としている。しかし、これほどあからさまになった事件でありながら、安貴王が不問に付されたなどということは普通あり得ない話であろう。左注の記述が不徹底なのは、中西進も簡潔に触れているように、「もとより王の刑罰もあつただろうが、ここにはふれていない」のであって<sup>(7)</sup>、この後の安貴王が、どのような処遇になったのかを見ていけば、罰に相当する扱いを受けたのだろうことが容易に察せられるのである。

ところで、本郷に退却させられた八上采女であるが、この事件との前後関係は不確かながら、藤原不比等の四男藤原麻呂と結婚して、かの『歌経標式』を著した藤原浜成を生んだ女性であろうといわれている。『尊卑分脈』で浜成の注記に「母因幡国八上郡采女 稲葉国造気豆之女」とある人物が、この八上采女であろうとの指摘がなされており<sup>(8)</sup>、「傾聴すべきものだ」との評価もあるように<sup>(9)</sup>、かなり有力な説となっている。もし彼女が本郷に返されて以降に成立した婚姻であれば、すでに采女ではなくなっているので問題はないといえるであろう。采女を妻にすることも、普通にはあり得ないように思われるが、『万葉集』には先例が存在していた。それは、藤原麻呂の祖父に当たる藤原鎌足である。

内大臣藤原卿の、采女安見兒を娶りし時に作りし歌一首

95 われはもや安見兒得たり皆人の得がてにすといふ安見兒得たり

この歌の背景には、鎌足を頼りにしなければ難局を乗り切れなかった当時の天智天皇の思惑があったとされているので<sup>(10)</sup>、この藤原麻呂の場合とは状況が全

(5) たとえば、『萬葉集』1、新日本古典文学大系（岩波書店、一九九九年）など。

(6) 前掲註（4）書目録注。

(7) 中西進校注『万葉集 全訳注原文付』1（講談社、一九七八年）二八九頁。

(8) 前掲註（4）書に同じ。

(9) 澤瀉久孝『萬葉集注釋』。

(10) 田村圓澄『藤原鎌足』（塙書房、一九六六年）。

く異なる。

その裏には、藤原氏と采女との微妙な関係めいたものが尾を引いており、それが事件を大きくした。そこで、八上采女の退却によって事件を収束させて、藤原麻呂との結婚が成立したのではあるまいかという想像もできよう。

しかし、安貴王の失態がこの処置だけで済んで、名誉回復が図られたわけではない。王は、この事件の前後に、もう一つ苦しまなければならない事情を抱えていたのである。次の歌がそれを示している。

紀女郎の怨恨の歌三首 鹿人大夫の女、名を小鹿と曰ふなり。安貴王の妻なり

- 643 世の中の女にしあらば我が渡る痛背の川を渡りかねぬや  
644 今は我はわびそしにける息の緒に思ひし君をゆるさく思へば  
645 白たへの袖別るべき日を近み心にむせひ音のみし泣かゆ

これらの歌で、怨恨の対象となっている人物が誰なのかについては、夙に鴻巣盛広が「安貴王と八上采女との関係が明らかにされてゐるから、女郎はこの事件を恨んだのかも知れない」として、安貴王を当事者とし、その心変わりを恨んだ歌であろうと述べている<sup>(11)</sup>。しかし、それにも関わらず、歌の制作年代が特定できないからであろうか、最近の注釈書は多く「怨恨」が誰に向けられたものかは不明としている<sup>(12)</sup>。しかし、この歌の題詞部分に「安貴王の妻なり」という記述がある点を慮れば、わざわざ安貴王以外の男性に恨みの歌を贈るというのは違和感が残るのではあるまいか。妻から夫の不祥事に対して言い贈っている歌と取る方が自然であると筆者は考える。

すると、果たして八上采女を娶ったという事件と、この紀女郎が妻になった時期との前後関係が問題になって来よう。安貴王の結婚がいつのことだったのかが不明である以上、采女事件を起こしたのが未婚段階だったのか、あるいは既婚の身でありながら犯してしまった過ちだったのかも確証は得られない。推定は一に、この643～645の歌の読み如何に頼るしかないであろう。

643の「痛背の川」は、「穴師川」のことではあるが、「あな（感動詞）<sup>せ</sup>夫」と嘆きの意が込められていると解され、「川を渡る」ことにも何か寓意があるのではないかとの指摘もあるが<sup>(13)</sup>、川を渡るということが、別地へ足を踏み入れることを意味するとすれば、そのことが「渡りかねる」即ち「躊躇われてできな

(11) 鴻巣盛広『萬葉集全釈』第1冊（秀英書房、一九八七年）五七二頁。

(12) たとえば、佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集』一（岩波書店、二〇一三年）や『萬葉集』1、新日本古典文学大系（岩波書店、一九九九年）など。

(13) 『萬葉集』1、新日本古典文学大系（岩波書店、一九九九年）。

い」というのは、安貴王との関係を断ち切ることができない己の心情の弱さを詠じたものと解せるのではないか。続く644の「ゆるさく」の「ゆるす」が「許す」ではなく、原義の「緩くする」即ち「手放す」の意であるとすれば、二人の間に分断の期が訪れたことの寂しさと気落ちとがないまぜに表出され、さらに穿って読めば、「音のみし泣かゆ」には、女郎の自責の念さえ含まれているようにも感じられる。安貴王を信じてきたにもかかわらず、この采女事件によって裏切られていたことがわかり、しかも王が何らかの罰に処せられるとなれば、一時的にかあるいは絶縁に近い形で別れかが伴ったであろうから、紀女郎の嘆きは一通りのものではなかったはずである。しかも、前述した安貴王の一人子である市原王は、生没年が未詳ながら、大体この前後に誕生したと推定されるので、どれも確証が得られない事柄ではあるものの、この夫妻は想像を絶するほどの困惑の渦中に置かれたことであろう。このことが、双方にとって心安からぬ後半生を送らせる結果を招いたのは痛恨の極みである。紀女郎が、やがて大伴家持との恋に陥るのも、決して女郎の浮心のみの行動ではないように思えるからである。なお、彼女の家持との交渉についての考察は、本稿の主題から外れるので措くことにする。

安貴王には、もう一首、巻八に1555の歌がある。秋の雑歌に収められている歌であるが、これもいつの作かはわからない。この事件よりも後のものであることは、後出の歌群よりして明らかである。

#### 安貴王の歌一首

1555 秋立ちていくか幾日あさけもあらねばたもとこの寝ぬる朝明の風は手本寒しも

普通に読めば、単なる秋の初めのある日の体感を述べた歌に過ぎないということになるであろう。しかし、彼が人生前半で起こした事件のことなどを勘案すると、立秋後の暑さの残る朝風に寒さを袖口に覚えたというのは、これも探って読めば彼の現在進行中の人生航路と無縁ではなかったのではないかという気がする。若い頃の過ちがいつまでも尾を引き、それが破滅を導き出していくような風潮は、決して好ましいことではないと思われるが、安貴王のその後の人生は、この過痕から抜け出せなかったことがわかるのである。

この境遇は、その後の王の官位昇進状況を見ると一目瞭然としている。『続日本紀』によると、安貴王が無位から初めて従五位下の位を授けられたのは、天平元年（七二九）三月のことであった。王の生年は未詳ではあるものの、大体西暦七〇〇年前後のことであろうと先述した。それに基づいて数えるならば、王は三十歳前後にして、やっと叙位されたということになろう。これは驚くべき遅れにほかならない。律令の選叙令によれば、諸王の子は蔭位によって通常二十一歳に官位が授けられると規定されているからである<sup>(14)</sup>。この遅れが、一途にかの事



件によって起こされたものとは断定しがたいが、全く無関係であったとは考えにくいであろう。さらに遅れの悲惨さは増し、何と安貴王が一階級昇進して従五位上になったのが、十六年後の天平十七年（七四五）正月のことなのであった。選叙令および慶雲三年（七〇六）の格によれば、考限は四年から六年の勤務成績で加階の対象とされるはずのものであるが、かくも長い年月、何の昇進もみなかったというのは、異例中の異例といってよく、いかに安貴王が当時の宮廷社会で冷遇されていたかがわかるのである。おそらくこの遅さは、彼には官職に値するものが与えられていなかった、そのために評定もできなかったためなのではないかと考えられる。このような可哀想とも惨めとも言える安貴王には、紀女郎の腹に成ったのか否か明らかでない一粒種の子、市原王がいた。この息子は、父親の置かれた姿をどのように見ていたのであろうか。

## 二 市原王

市原王の生没年も未詳であることは前述した。彼が公的に歴史の上に初めて名を見せるのは、天平十一年（七三九）、光明皇后に付属する皇后宮職に設けられた写経所（後に東大寺の所管）の「舍人」としてである。「正倉院文書」の天平十一年（七三九）正月二十八日の写経司解に「舍人市原王」として署名している<sup>(15)</sup>。この年の記録には、しきりに市原王の名が登場している。舍人と言えば、下働きの存在で、二十歳に満たない若人が充てられることが多いが、もし父の安貴王による不祥事の影響があったとしたならば、この時点で市原王は他の舍人よりも多少年をとっていたかもしれない。後に市原王は、東大寺を中心とした写経事業の中心的人物となり、大仏造営の指導的な存在として仏教関係の仕事に携わることも多くなっていくが、これも父親の事件の余波と言えるのかもしれない。

しかし、市原王は『万葉集』の方では、それよりも六年前にすでに顔を出しており、天平五年（七三三）に988の歌を遺している。

市原王の、宴にして父安貴王を禱<sup>ことほ</sup>きし歌一首  
988 春草は後は移ろふ巖なす常磐にいませ尊き我が君

この歌を天平五年の作と認めるのは、当歌の載る巻六は、種々の歌が養老七年（七二三）から天平十六年（七四四）まで年代順に配列されており、988の歌に先立つ796の歌の題詞に「五年癸酉、草香山を超えし時に、神社忌寸老麻呂の作りし歌二首」とあり、後に続く996の歌の題詞に「六年甲戌、海犬養宿祢岡麻呂

(14)『新訂増補 国史大系 第22巻 律・令義解』選叙令。

(15)『大日本古文書』巻2による。

の詔に応へし歌一首」とあることから、988の歌は天平五年内のものと位置づけられるわけである。

ところで、市原王の988の宴とは、どのような宴であったのか、また、この歌は何を言わんとした歌であったのか。この時、市原王が何歳であったのかも不確かなのであるが、おそらく十代半ばごろに当たると考えてよいだろう。歌は父の安貴王を「禱」即ち「祈禱」したというのであるから、「神に事を告げ、さいわいを願い求めた」歌ということになろう。そうであれば、この宴が親睦や遊樂を求めたようなものではなく、また「父王の長寿を願った賀歌」<sup>(16)</sup>でもなく、もう少し違った意味合いの宴ではなかったろうかと推測される。歌の初二句の「春草は後は移ろふ」の「移ろふ」は、原文が「落易」となっているため、「カルトモ」とか「カレヤスシ」などという訓みも考えられているが、今は広く支持される「移ろふ」に従っておく。原文の文字使いからして、今を盛りと伸びつつある春草も、その時季を過ぎれば儚く衰え行くものだと言うことを意味させていることは明白であろう。これはもちろん比喩的表現である。後続の句を読めば、「巖のように磐石であってください、尊い父君よ」に対立する状況や風潮を指しているばかりか、そのような生き方をしている世人をも暗示している如く受けとれる。一時の華やかさを求めたり溺れたりしないで、巖の如く堅固でいてほしいというのは、単に長寿を願っているのではなく、父親の心の動揺を鎮静させんとしている口吻のようにも読みとれる。一体この歌の背景には何があるのだろうか。

ここで父親の安貴王の身分を思い見る必要があろう。先に述べた通り、安貴王が長い間の無位から初めて従五位下の位を授けられたのは、天平元年（七二九）三月であった。律令制度の規定では、官位は四年ごとの評定を受け、その勤務評価に基づいて、良好と認められた場合には一階級昇進することになっていた。これを叙選という<sup>(17)</sup>。この988の歌が天平五年（七三三）の作であるならば、父親安貴王はまさに叙選の年に当たるわけである。しかし、前述の如く、王が一階級昇って従五位上になったのは、十六年後の天平十七年（七四五）正月なのであった。すなわち、この天平五年の官位昇進は全く考慮されなかったということなのである。もとより安貴王父子がこの叙選にどれほどの期待を抱いていたかは定かでない。そのことを期して宴を催していたのかも定かではない。あるいは叙選が叶わなかったがために開いた一種の残念会のような宴であったのかも、証拠を求めることは困難である。歌の題詞による限り、この歌は安貴王が在席した宴で、子の市原王が失意落胆する父に向かって贈った励ましの歌と読解できよう。一時

(16) 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎校注『萬葉集』2、新潮日本古典集成（新潮社、一九七六年）の当歌注。

(17) 野村忠夫『律令官人制の研究』（吉川弘文館、一九六七年）、同『律令政治の諸様相』（塙書房、一九六八年）。



の華やかな榮進といえども、それは春に咲く草花の如く時とともに儚くしほむばかりです。かの巖のように揺るぎない磐石の意思と身体を有して、またの叙選の機会まで変わらぬ存在であってください、私にとって尊いお父さん。この叫びにも似た市原王の歌に、父親のみならず、宴に列なった人々は感泣したのではあるまいか。想像の域を出ないながらも、そういう場面が浮かび来る。他に例を見ない歌と位置づけてよい歌なのである。

その後、天平八年（七三六）に市原王は1007の歌を遺す。

市原王の独り子なることを悲しみし歌一首

1007 言間はぬ木すら妹と兄とありといふをただ独り子にあるが苦しさ

この歌も、題詞に作歌の年月が記されていないが、直前の1005の歌が「八年丙子の夏六月、芳野離宮に幸したまひし時に、山部宿祢赤人の、詔に応へて作りし歌一首 短歌を并せたり」であり、1007の数首後に続く1013の歌の題詞が「九年丁丑の春正月、橘少卿と諸大夫等、彈正尹門部王の家に集ひて宴せし歌二首」とあるので、1007の制作年代は天平八年内のものであることがわかる。市原王は十歳台後半でもあったろうか。題詞に唱うように歌の内容もまさに自分が独り子であることを悲しんでいる歌に読める。一体どのような場で詠んだ歌なのであろうか。普通何の気なしに読むと、市原王が一人ぼつんと呟いた歌のように思えようが、この時代、歌を孤独情況で詠んで遺すということは、ほとんどあり得なかったであろうから、誰か周りに人がいる中で詠んだものに相違ない。この1007の歌に先立つ1005、1006の歌は、山部赤人の吉野行幸応詔歌であり、1009は肆宴をなして橘を賀する御製の歌、1010は橘宿祢奈良麻呂の応詔歌、1011以降は宴席の歌が続いており、そうした歌々に囲まれた市原王1007の歌も、人中にあっての歌、おそらく宴席で詠まれた歌と捉えるのが妥当であろう。市原王は、この時まだ無位の身であり、舎人の役に就く前後であったかもしれない。宴とはいえ、その席がどのような形のものであったのかも推量の域を出ない。親しい者同士の私的な宴であれば、家族の一員も顔を出し、家と家との結びつきを固めるという意味合いを持ったであろうし、有力な家柄の者が呼び集めた宴であれば、その勢力の拡大や発展を意図して催すこともあったに違いない。『懷風藻』中の詩苑での詩などは、後者の如き背景を有する作品群なのである。

市原王の1007の後に掲げられている次の歌などは、前者の例に入れられる歌と捉えることも可能であろう。

忌部首黒麻呂の、友のおそ餘く来たることを恨みし歌一首

1008 山の端にいさよふ月の出でむかと我が待つ君が夜はふけにつつ

市原王の歌が、そのどちらの例に属するかは、もちろん不明であるものの、このような宴に招かれ、一族や家族の面々が集まった中で、自分が孤独であることをつくづく思い知らされたのではないだろうか。父の安貴王は依然として従五位下のままで位も上がらず、このころには妻紀女郎との婚姻生活も破綻していたとするならば、市原王を支えてくれる身内は、ほとんどいないも同然の生活の中で招かれた宴で、歌を所望された際、王の口から出た歌が、この「独り子」の歌だったのではあるまいか。

これらの他に、市原王の歌で制作年代がある程度知られ、王の身邊の様子が窺えるものに、1546と1551の歌がある。いずれも秋の雑歌の部立に収められたものであり、前後に並ぶ歌の題詞から推すと、天平二年（七三〇）から天平八年（七三六）までの間の歌のようである。これらの歌で注目されるのは、市原王の歌の前後に、しきりと湯原王の歌が並ぶことである。湯原王は、光仁天皇の弟に当たり、市原王からは大叔父に当たる。孤独がちな王に対して、この大叔父は何かと親身に接してくれていたのかもしれない。

#### 湯原王の七夕の歌二首

1544 彦星の思ひますらむ心より見る我苦し夜のふけ行けば

1545 織女の袖つぐ<sup>よひ</sup>夕の暁は川瀬の鶴は鳴かずともよし

#### 市原王の七夕の歌一首

1546 妹がり和我が行く道の川しあればつくめ結ぶと夜そふけにける

この二人の歌の十数首前には、天平二年（七三〇）に詠まれた七夕歌があるが、それと関係があるのかは不明である。湯原王の歌が、地上から空を見上げて歌っているのに対して、市原王の歌は、彦星の身になって歌っているという点に違いはあるものの、同時に詠まれた歌ではないかと思われる。

次に掲げる歌群も、制作年月が定かではないが、湯原王と市原王のみならず、父親の安貴王の名も登場する点で注目されよう。八首続く歌々は、いずれも時雨後の宵の宴のものなれば、同時の制作とみなしてよいものと思われる。

#### 典鑄正紀朝臣鹿人の、衛門大尉大伴宿祢稻公の跡見の庄に至りて作りし歌一首

1549 射目立てて跡見の岡辺のなでしこが花ふさ手折り我は持ちて行く奈良人のため

#### 湯原王の鳴く鹿の歌一首

1550 秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の遥けさ

#### 市原王の歌一首

1551 時待ちて降りししぐれの雨止みぬ明けむ朝か山のもみたむ

湯原王の蟋蟀<sup>こほろぎ</sup>の歌一首

- 1552 夕月夜心もしのに白露の置くこの庭にこほろぎ鳴くも  
衛門大尉大伴宿禰稻公の歌一首
- 1553 しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末<sup>こぬれ</sup>あまねく色づきにけり  
大伴家持の和せし歌一首
- 1554 大君の三笠の山のもみち葉は今日のしぐれに散りか過ぎなむ  
安貴王の歌一首
- 1555 秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は手本寒しも  
忌部首黒麻呂の歌一首
- 1556 秋田刈る仮廬<sup>こほ</sup>もいまだ壊たねば雁が音寒し霜も置きぬがに

歌がこの掲載順に詠まれて記録されたのかどうかはわからぬながらも、市原王の歌の前と後に、ひたすら動物を材にして歌っている湯原王の歌の意図は那邊にあったのか、自分の歌を誇示するよりも何か市原王の歌をガードしているようにも見える。もとより大伴氏の庄で催された宴であれば、その席に大伴家持が加わっていることは不思議ではないが、ここに集った人たちに親密な心の通い合いがあったとすれば、市原王のみならず、父親の安貴王も大伴氏と昵懇の間柄にあったということが見えてこよう。父子が宴に同席することはあり得たであろうが、この宴で1549の旋頭歌を読んでいる紀朝臣鹿人が、安貴王の妻なる紀女郎の父親であることを思うと、一体これはどういう集いであったのか不思議な気もする。だが、一つ考えられるのは、紀朝臣鹿人が宴に臨席している点から、市原王の母は紀女郎でよいのではないかという点である。もちろんこれは単なる推測に過ぎないことではあるが、采女事件の当事者であった父の安貴王と紀鹿人との間には、この時点で和解らしきものが成立していたとみなすことも可能かもしれない。

市原王が天平十一年（七三九）正月の写経所解に舎人として署名していることは前述したが、『万葉集』巻八には、この年の十月に行われた光明皇后の宮での維摩講に、市原王も関わった歌が載っている。歌は王の作ではないであろう。

仏前に唱ひし歌一首

- 1594 しぐれの雨間なくな降りそ紅ににはへる山の散らまく惜しも  
右は、冬十月、皇后の宮の維摩講の終日に、大唐、高麗等の種々の音楽を供養して、尔して乃ちこの歌詞を唱ひき。琴を弾きしものは、市原王、忍坂王<sup>後に姓大原真人赤麻呂を賜はりしなり。</sup>、歌子は田口朝臣家守、河辺朝臣東人、置始連長谷部等十数人なり。

この歌が、仏教の教義とどのような関連を持つのかはわからぬが、市原王が光明皇后の宮における催しに参加した背景には、琴の演奏家としての才能もさるこ

とながら、皇后宮職に設けられた写経所の舎人という立場も作用していたことであろう。

やがて市原王に位の授けられる日が来る。『続日本紀』によれば、それは天平十五年（七四三）五月五日のことで、高丘王・林王と並んで従五位下となっている。このことは何気なく見過ごされがちであるが、父親の安貴王のことを考え合わせると、驚くべきことがわかる。前述した如く、安貴王が従五位下から従五位上に昇ったのは、天平元年（七二九）から十六年後の天平十七年（七四五）正月であった。となると、父と子は一年八ヵ月の間、同じ官位に置かれていたことになるのである。その年齢差がいかにほどであったかは定かでないが、この仕打ちはいまにも酷いものではあるまいか。市原王の988の歌の禱きによって耐え続けてきた父の安貴王は、この約二年の間、これまで以上につらい日々を送ったことと思われるが、天平十七年、従五位上に昇った以後の経歴は杳として伝わらない。本人の歌はおろか、叙位や没年の記事も存しないところをみると、薄倖のうちに生を終えたのではないだろうか。

一方の市原王は、父と同官位の天平十六年（七四四）正月十一日、大伴家持らと活道の岡<sup>いくち</sup>で宴を催した歌を遺している。

- 同じ月の十一日、活道の岡に登りて一株の松の下に集ひて飲みし歌二首  
1042 一つ松幾代か経ぬる吹く風の音の清きは年深いかも  
右の一首は、市原王の作なり。  
1043 たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとそ思ふ  
右の一首は、大伴宿祢家持の作なり。

天平十二年（七四〇）に起きた藤原広嗣の乱によって、聖武天皇は同年十二月、山背国の木津川に面した地に建てた離宮に遷都しており、この歌が詠まれた当時、この恭仁宮が都として利用されていた。さらに天皇は、同十六年（七四四）二月に恭仁宮を去って難波に行き、翌十七年（七四五）五月に平城京へ戻るのであるが、この1042の歌にある「活道の岡」は恭仁宮近くの岡らしいという<sup>(18)</sup>。天皇が、この地を捨て去ろうとする直前に当たる時期に、市原王らはどのような意図で、岡の一本松のもとで宴飲したのであろうか。聖武天皇の彷徨については諸説があって断じがたいが、この歌の詠まれた頃には、恭仁宮がやがて廃せられるであろうという予測は十分ついていたと思われるので、あるいはこのような情勢のもとで、世は変動しようとも、この松の緑の如く、いつまでも変わらぬ心を持ち続けたいと誓い合った歌だったのかもしれない。

この当時も、市原王は依然として写経所に勤める身で、その業務を兼ねながら

---

(18) この「活道の岡」という地名については所在未詳。

東大寺の大仏造営等の仕事を任せられ、俗に言う抹香臭さがつきまとう経歴なのであるが、時折、玄蕃頭や地方の国守なども兼任している。天平十九年（七四七）には写経司長官になり、以後、写経事業の中心的な存在として、天平宝字元年（七五七）の頃まで活躍が続く。なお、天平二十一年（七四九）が四月十四日に天平感宝元年と改元された日に、市原王は従五位下から従五位上へと昇進したが、その翌年の天平勝宝二年（七五〇）十二月九日には、東大寺に遣わされた大納言藤原仲麻呂から正五位下の位を授かっている。おそらく東大寺に関わる仕事の功績を賞してのことであろうが、異例のスピード昇進で、もし安貴王が存命であったならば、この時点で父の官位をも越えたのではないだろうか。

市原王には、他に制作年代も歌の背景も明らかにし得ない 412 や 662 の歌もあるが、それらは措いて、彼の最後の歌と考えられる 4500 の歌を見てみよう。『万葉集』が終わる約一年前の天平宝字二年（七五八）二月、中臣清麻呂の家で催された宴での作で、この時、市原王は治部大輔の職に就いていたことがわかる。宴席で詠まれた歌は十五首を数えるが、前半部分のみを掲げるにとどめたい。

二月、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅に於て宴せし歌十五首

4496 恨めしく君はもあるかやどの梅の散り過ぐるまで見しめずありける

右の一首は、治部少輔大原今城真人。

4497 見むと言はば否と言はめや梅の花散り過ぐるまで君が来まさぬ

右の一首は、主人中臣清麻呂朝臣。

4498 はしきよし今日の主人は磯松の常<sup>あるじ</sup>にいまさね今も見ると

右の一首は、右中弁大伴宿祢家持。

4499 わが背子しかくし聞こさば天地の神を乞ひ禱み長くとぞ思ふ

右の一首は、主人中臣清麻呂朝臣。

4500 梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ

右の一首は、治部大輔市原王。

4501 八千種の花は移ろふ常磐なる松のさ枝を我は結ばな

右の一首は、右中弁大伴宿祢家持。

4502 梅の花咲き散る春の長き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも

右の一首は、大蔵大輔甘南備伊香真人。（以下略）

これらの歌が、並べられた順に詠まれたのだとすると、この宴はあたかも無礼講のように映る。主人の中臣清麻呂に向かって、最初に歌い出しているのが、市原王よりも下位の治部少輔大原今城だからである。普通に考えるならば、宴の主人たる人物に、上司を差し置いて下位の者が口火を切るということはありません、主賓たる人物の歌い出しで宴は進められるものであろう<sup>(19)</sup>。間違いなくこの宴の主賓は、官位の上からいっても三番目に歌が載る大伴家持であったはずである。

彼の4498の歌を読めば、如何にもそういう挨拶の歌であり、それに対して主人の清麻呂が鄭重に応えているのが4499の歌であることは容易に読みとれよう。そうであれば、4496の大原今城の歌は、宴の始まる前の世話の発言であって、4497はそれに誘発されて応えた歌だったのだらうということが見えてくる。したがって、この二首は宴の枕のようなもので、宴そのものはそれなりの形式を踏んで行われていたのだらうと想像される。市原王は、主賓の大伴家持の直後に歌っているところからして、おそらく主賓に次ぐ立場でこの宴に招かれていたのだらうということも言えてこよう。4500の歌は、出来はともかくとして、いかにも宴の主人に対する礼の籠った歌になっている。

天平宝字二年といえば、『万葉集』の歌が終わる一年前のことであり、この年の六月に大伴家持は因幡守に任ぜられ、翌年の正月一日、国庁で国郡の司らと宴を催し、その時に詠んだ歌が、『万葉集』で最後のものとなる。市原王は、若い頃には湯原王の庇護を受けていたらしく思えるが、後半生は大伴家持との親交が指摘できる。その意味から言っても、市原王は『万葉集』終末期にくっきりと名を遺す歌人として、もっと注目されてよい存在なのではないだろうか。

その後の市原王はどうなったか。以下は略述する。市原王が、天平勝宝二年（七五〇）十二月に東大寺で藤原仲麻呂から正五位下の位を授かったことは前述した。このことから、市原王は仲麻呂との結びつきを持ったのではないかと推定する向きもある。仲麻呂こと恵美押勝は、権力を手中にした余り、驕りが生じ、『万葉集』の歌が終わった五年後の天平宝字八年（七六四）九月、道鏡排斥を狙った恵美押勝の乱を起こし、琵琶湖近辺で斬殺されたことは、史上有名な事件になっている。不思議なことに、市原王の名は、この事件後、史上に全く現れなくなる。そのため、市原王もこの乱で藤原氏に加担して消されたのではないかという。天平宝字四年（七六〇）六月、光明皇太后が亡くなった際、市原王が葬送の山作司になっていることから、藤原氏側では王を自分の味方と見なそうとしたかもしれない。しかし、『万葉集』で見える限り、市原王は大伴氏との付き合いはあっても、藤原氏と行動を共にするほどの関係があったとは思えず、有力な証拠とはなり得ないであろう。仮に恵美押勝の乱に巻き込まれたとするならば、藤原氏に加担したのではなく、逆に仲麻呂勢力によって肅清された可能性すらあろう。市原王が、大伴氏との関係のみならず、仏教事業に深い関わりを有していたことを重く見るならば、もともと道鏡由来の事件だった故に、藤原氏から危険因子として命を奪われる不幸は起こり得たかもしれない。しかしながら、この件は想像の域を出るものではなく、もとより一切は不明である。

市原王の妻は、光仁天皇の娘の三品能登内親王であった。『続日本紀』によれ

---

(19) ちなみに、中臣清麻呂の就いた式部大輔は正五位下相当官。大伴家持の就いた右中弁は正五位上相当官。治部大輔は正五位下相当官、治部少輔は従五位下相当官である。



ば、内親王が天応元年（七八一）二月に四十九歳で亡くなった時、その葬儀に遣わされたのが大伴家持らであったという<sup>(20)</sup>。官位もさして高くなかった市原王と内親王との婚姻は、やや釣り合いを欠くようにも思えるが、市原王の才能や写経所での働きなどが、それだけ光仁天皇に認められていたためでもあったろう。二人の間には、五百井女王と五百枝王（のち春原五百枝）という子がいたことも、内親王没年の記事に見えている<sup>(21)</sup>。

おわりに

以上、『万葉集』の歌を素材にしながら、安貴王と市原王の人物像を追ってみた。この二人の王は、父と子という関係であるが、生没年も含めて未詳な点が多い人物である。

しかし、『万葉集』に遺された歌から足取りを探ると、安貴王は、采女との恋で禁制を犯したことで、妻の紀女郎との間に亀裂が生じたことが読みとれる。その事件の影響によって、安貴王は出世の道を閉ざされて、永く不遇の道を歩むことになった。

一方、子の市原王は、そうした父への思いを歌に表しており、父に向けて幸いを祈る歌を詠んだり、独り子の侘しさを嘆く歌を詠んだりしている。また市原王は、写経所の舎人となって、大仏造営などの事業にも貢献することで、政治的な地位を確保することに成功した。安貴王と市原王は、一時的に官位が並んでおり、父と子の対照的な歩みを看取することができる。さらに、市原王には、湯原王や大伴家持と交流しながら詠んだ歌もあり、『万葉集』の最後尾を飾る歌人の一人でもあった。

このように、安貴王と市原王は、いずれも最期を知り得ない無名の父子であったものの、『万葉集』では閑却し得ない歌人として、記憶にとどめるべき存在であったと思えるのである。

---

(20) 『続日本紀』 卷三十六、天応元年（七八一）二月十七日条。

(21) 同上。